

オリンピックとオリーブ冠 —勝者に「月桂冠」が与えられるという誤解について—

春日 芳美 (大東文化大学スポーツ・健康科学部)

The Olive Wreath for the Olympic champions: The Misunderstanding about the Laurel Wreath in Japan

Yoshimi KASUGA

はじめに

月桂冠という言葉からイメージするものは勝利と栄光であり、特に競技スポーツの表彰式を思い浮かべる人が多いのではないだろうか。月桂冠とは、月桂樹（ローレル）の葉を編んでつくられた冠のことである。ある種の勝者に月桂冠を与えるという習わし¹は、古代ギリシャの習慣に由来するものである。古代ギリシャでは、いくつかの都市で定期的に祭典競技が行われていた。その一つにオリンピックがあるが、ここで「オリンピックの勝者に月桂冠が与えられる」と考えるのは間違いである。正しくは、オリンピックの勝者に贈られるのは「オリーブの冠」であり、ローレルの葉でつくられた月桂冠ではない²。しかし、日本では明治期から現在に至るまで「オリンピックと月桂冠」の誤解が残ったままである。本稿では、日本において「オリンピックの勝者に月桂冠が与えられる」という誤解がどのように生じたのかを、明治期から昭和期にかけて検討する。

1. 勝者に与えられるものは何か

体育史研究で著名な岸野雄三は、雑誌『体育の科学』において「オリンピュアでは月桂冠が授与されたのではなく、オリーブ橄欖冠であつたが、日本では古くから月桂冠と間違われていたし、そ

¹ ノーベル賞受賞者を Nobel Laureates と呼ぶことや、ラテン語でローレルの果実を意味する *baccalaureatus* がアメリカの学士号やインターナショナルスクールの大学入学資格試験の語源となっているように、月桂樹は主に芸術や学術の優秀者を象徴する樹木である。

² 国際オリンピック委員会 (IOC) は、2016 年から「オリンピックローレル (Olympic Laurel)」という賞を導入した。これは “made significant achievements in education, culture, development and peace through sport”. とされ、スポーツを通じて教育、文化、開発、平和に顕著な成果を挙げた人を対象としたものである。

れが常識化している。月桂冠はピュティア競技の際に与えられたので注意する必要がある³と注記している。以下では、明治期から昭和中期までの時期の資料をもとにしてオリンピックで勝者に与えられるものがどのように説明されているのかを検討する。

1-1. 橄欖（かんらん）、そしてオリーブの冠

橄欖（かんらん）は、オリーブを指す訳語として中国や日本で使用されていた⁴。1883（明治9）年に文部省から出版された『百科全書希臘史篇』には、「オリンピック」及其他ノ嬉戯（ゲイムス）という項に次のような記述がある⁵。

太古ヨリ定例トナス所ノ祝典ニシテ最モ世人ノ揚言スルモノハ即チオリンピック嬉戯ナリ。エリス州オリンピヤノ平野ジュピトルノ祠傍ニ於テ四年ゴトニコレヲ挙行ス。（中略）競争ノ戯ニ於テ勝者に與フル所ノ勲章ハ野生橄欖ノ枝ヲ以テ環形ニ作りタル頭上ノ裝飾ニ過キスト雖モ希臘全国ヨリ会衆スル所ノ観客ニ其名ヲ公告シ而してオリンピヤニ於テジュピトルノ神林中ニ其肖像ヲ設置シコレヲ不朽ニ伝フルヲ以テ一世ノ名譽ト謂フモ亦余リアリ。…（句点、下線著者）⁶

これは前年に出版されたヒロビブリアス著『教育史. 上』（西村茂樹訳）とほぼ同じ記述である。このように、明治初期の時点ではオリンピックの勝者に与えられるのは「橄欖の冠」であるとされていた。その後、講道館文化会の雑誌『作興』に大谷武一が寄稿した「古代オリンピック・ゲイムス」では、「常時野生の橄欖樹は、彼らの周囲に豊富であつたので、競技の優勝者にはその枝を冠らせしめた」と説明するほか、古代4大祭典競技とされる他の競技会にも触れ、「ピシアンゲイムズでは、…、オリムピアの例に倣つて、月桂樹の冠が酬ひられるやうになつた。同様に、ネメアの勝者には、オランダゼリが冠せられた。イストミアンゲイムズには、松が冠せられた」との説明があり、月桂冠はオリンピックの勝者に与えられるものではないということがよくわかる説明となっている⁷。

橄欖とオリーブを併記する例としては、1907（明治40）年の『世界之少年』に掲載された「世界最大の運動競技会（オリンピヤの運動会）」という記事があり、「勝った者には橄欖の枝を授ける事

³ 岸野、1956年、397-398頁

⁴ 実際には橄欖とオリーブは別の植物である。田代安定は1877（明治10）年に『農業雑誌』で、オリーブと橄欖は別の植物でありオリーブを橄欖と訳すのは誤りであると指摘している。金子（2008）によれば、日本で起こったこの誤訳は、オリーブを橄欖と誤訳した中国経由の漢訳聖書の影響もあったとされる。この点については、中国で西洋人が橄欖の事を「Chinese olive」と呼んでいたことが関係していると田代（同掲書）も指摘している。

⁵ なお、ここではオリンピック以外の4大祭典競技についても「ビーシヤン」「子ミヤン」「イスミヤン」の嬉戯として記述がある。

⁶ 文部省、1883年、35-36頁

⁷ 大谷、1924年、38頁

にした」と説明される⁸。この他にも、橄欖を「オリーブ」という用語と併記した記述として、野口源三郎の『オリムピックの知識』⁹と、1937（昭和12）年に翻訳出版されたウェブスターの『オリムピック競技史』がある¹⁰。

そして、オリンピックの勝者に「オリーブの冠」が贈られるとする記述がみられるものとしては、雑誌『歴史と地理』に掲載された1923（大正12）年の記事「オリムピヤ祝祭について」がある。ここでは、「賞与は、ヘラクレスが植ゑたと伝へられる神聖なるオリーブ樹枝でつくつた冠である」と記述されている。

さらに、1930（昭和5）年に出版された『朝日常識講座 スポーツの話』では古代オリンピックについて「勝利者が公の賞品として与へられたものは、神苑の森から切り取られたオリーブの冠」との説明がある¹¹。

日本のIOC委員であり東京都知事でもあった東龍太郎の『オリンピック』にも、「勝利者には、価格でははかることのできない最高のものとして、オリーブの葉冠が与えられた」との記述がある。

以上のように、オリンピックの勝者に贈られるものを1)「橄欖の冠」とするもの、2) 橄欖とオリーブを併記するもの、3)「オリーブの冠」とするものがあつた。この記述がみられる時期については特に偏りはなく、明治初期から昭和期全般を通してみられた。

1-2. 月桂樹の冠

オリンピックの勝者に与えられるものとして月桂冠という用語が使用されてた比較的早い時期の事例として、1905（明治38）年に出版された『月桂樹：戦捷記念図案資料』がある¹²。ここでは、「その御祭（古代オリンピック：著者注）には徒競走があつて、その最優捷のチャンピオンにはこの果実の付いて居る月桂樹ロレラスの枝で青葉の儘に冠に造つてそれを被せた。」と説明されている。また、1909（明治42）年の雑誌『運動世界』の記事「オリンピアゲームの優勝者」では、近代オリンピックについての記述で月桂冠という言葉が使用されている。この記事では、1908年のロンドンオリンピックマラソンで優勝したジョニー・ヘイズ¹³がどのような人物であるか紹介しているが、「彼は畏くも、英国皇后陛下の御手づから、月桂冠を授けられた」と記述されている。

また、1914（大正3）年の『花の物語』では、「月桂樹」の項に月桂冠の挿絵があり、次のように説明されている。

⁸ 藤井、1907年、14頁

⁹ 「古代オリムピアの競技」の章の中で、「七、橄欖の冠」という項があり、「オリムピック競技に於ける唯一の賞品はゼウスの神殿を中心とした聖地アルテイスに生ひ繁つてゐた聖木橄欖（オリーブ）の枝葉で造つた冠であつた。」と説明され、その由来やベルリンオリンピックでもオリーブの冠が用意されたことに言及している。

¹⁰ 古代オリンピックについての記述で、「橄欖オリーブの聖樹」という項があり、「優勝者はオリンピアのアルチス（森の義）にあるニムフの神殿に近く生ふる橄欖の聖樹からとつた葉冠を戴かせられた…」とある。

¹¹ 小高、1930年、32頁

¹² 月桂樹の冠については、1882（明治8）年に出版された『初学須知（牙氏）巻之四』において月桂樹の項に「詩人ノ額ニ戴キシハ、此樹ノ枝ナリ。学校試験ノ時ハ褒賞トシテ月桂樹ノ葉ヲ冠背シムル式アリ」と説明されており、オリンピックについての記述はない。

¹³ 本文中では「ジョンジョセフヘース」と表記されている。

挿絵に、月桂樹の枝が花輪のやうに造られたのがございませう。其れは月桂冠といひまして、右の言伝え（アポロンとダフネの話：著者注）から、古希臘で、其国の諸神を祀つたオリンピア神殿の前庭に、四年目毎に執行はれた、いはゆるオリンピア祭の折、選ばれた者等が各種の競技に優勝すを得た場合、其頭上に置くものとされてゐたのでございませう。¹⁴

そして、見逃すことができないのは箕作元八による一連の著作である。箕作元八は日本の西洋史学の草創期における重要人物であり、東京帝国大学文科の西洋史教授として教授要目の作成や教科書執筆に携わっていた。教科書以外の西洋史に関する著作も数多く、信頼のおける著者として大きな影響力をもっていたと考えられる。重要な点は、箕作が一貫して「オリンピックでは月桂樹の冠を与えられる」と記述している点である。箕作が執筆に関わった最初の教科書『西洋史綱』（1899）には、古代ギリシャで行われたオリンピアの競技会に関する記述があるものの、勝者に与えられるものに関する説明はない。しかし、同年出版の西洋史綱の教師向け解説書『西洋史綱要解・上巻』には、「勝者には月桂樹の冠を与ふ。凡てギリシア人の懸賞は、月桂冠を最上とす」¹⁵との説明がある。また、柔道界本部の雑誌『柔道』において箕作は、古代オリンピックを紹介する記事の中で「月桂冠を授かる名誉の優勝者」という項を設け、「優勝者には月桂樹の冠を授ける。…ギリシャ人が此の月桂冠を得るのを非常な名誉として憧憬した事は想像の外である」としている¹⁶。ただし、これらの記述は箕作の全ての歴史教科書にみられるものではないという点にも注意が必要である（表1）。また、なぜこの時点で箕作は「月桂冠」という名称を使用したのかを明らかにするため、翻訳元となる原著が何だったのか探す必要があるが、現時点ではまだ検討できていない。

表1. 箕作元八編著の著作における古代オリンピック関連の記述

出版年	書名	オリンピアの競技会に関する記述
1899（明治32）	西洋史綱	大祭ありて、種々の競技（注として： <u>olympia</u> ）を行ひ、苟もギリシア民族なりと信ずる市は、皆之に人を遣り、競技の勝敗に非常の重きを置けり。
1899（明治32）	西洋史綱要解、上巻	勝者には月桂樹の冠を与ふ。凡てギリシア人の懸賞は月桂冠を最上とす。
1902（明治35）	西洋史略	オリンピア大祭について記述、冠の記述はなし
1907（明治40）	新編西洋史綱	オリンピア大祭について記述、冠の記述はなし
1911（明治44）	西洋史教本	オリンピア大祭について記述、冠の記述はなし

¹⁴ 内山、1914年、12頁

¹⁵ 箕作、1899年、70頁

¹⁶ 箕作、1916年、21頁。この記述は前年に出版された箕作元八『西洋史話』とほぼ同じ内容である。

1911 (明治 44)	西洋史講話	記述なし
1915 (大正 4)	西洋史話	勝った者には、月桂樹の冠を与へる。
1919 (大正 8)	新定西洋史教科書	オリンピヤ大祭について記述、冠の記述はなし
1924 (大正 13)	西洋史教本	オリンピヤ大祭について記述、冠の記述はなし

牧野富太郎による『牧野日本植物図鑑』の初版(1940)にも、「歐洲二在リテハ古来此枝葉ノ環ヲ戦勝或ハ「オリンピック」競技ノ名誉表象トス。」との説明がある。そして、もう1点見逃せないのが、日本書籍の教科書『小学校国語 5年の1』(昭和35年検定)の記述である。「オリンピックの由来」と題された文章で、「ゆうしょう者には、かんむりがあたえられた。そのかんむりは、アルチスの森から、金のおので切り取った、ゲッケイジュのえだでつくったものであった。」¹⁷と説明されている。

このように、「オリンピックと月桂冠」に関する誤解はあらゆる書籍、新聞報道の中でそのまま使用され、一般教養として定着したと考えられる。

1-3. 「オリーブの月桂冠」?

少数ではあるが、「オリーブの枝で編んだ冠が月桂冠である」という説明がなされている著作もある。1925(大正14)年に出版された広瀬謙三著『運動競技の研究』では、次のように説明されている。

…然して特に面白いのは公の賞品が此神域に生じたオリーブの枝で作った冠とパームの枝だけで勝利者は観覧者の面前に於て質素なる月桂冠を戴き此枝を翳し公衆の歓呼を受けたのである。(下線著者)¹⁸

この説明は、1927(昭和2)年に出版された同著者の『運動競技の新研究』でもほぼ同じである。しかし、その後1936(昭和11)年に出版された『スポーツと冒険物語』の中で広瀬が執筆した「オリムピック物語」では、「特に面白いのは、優勝者に月桂樹の冠を与へて、その名誉をあらはすほかには、なんら金目のものを与へなかつたことです」(下線著者)¹⁹と記述されており、何がきっかけで認識に変化が起こったのかが興味深い。

なお、「オリーブの枝でつくる月桂冠」という記述は、1956(昭和31)年の『スポーツ(絵とき百科:14)』にもあり、「オリーブの小えだであんだかんむりを、優勝した選手のあたまにのせてやるだけで、そのほかは、なにもあたえないのです。…このかんむりを、げっけいかん(月桂冠)と

¹⁷ 日本書籍、1960年、48頁

¹⁸ 広瀬、1925年、234頁

¹⁹ 飛田・豊島、1936年、6頁

いいました。」と説明されている。

このように、オリンピックと月桂冠に関する誤解には、月桂樹とオリーブが同じ植物であるという誤った認識も一部含まれていたと考えられる。

2. なぜ「オリンピックと月桂冠」の誤解が生まれたのか

日本に古代オリンピックの知識が伝わった当初、優勝者に与えられるものはオリーブの訳語としての「橄欖」の冠とされていた。しかし、その後勝利の象徴としての月桂樹に関する記述がみられるようになると、「オリンピックで与えられるのは月桂冠ではない」という指摘がありながらも誤解は現在に至るまで根強く残った。その原因を検討する。

2-1. 日露戦争(1904-1905)と月桂樹

月桂樹(学名:Laurus nobilis)は地中海沿岸地域の原産とされ、日本に入ってきたのは明治初年であるという。その月桂樹が日本において一般的に認知されたのは、日露戦争がきっかけであると考えられる。戦勝を記念して、フランスから日本に月桂樹が贈られた。1905(明治38)年出版の『月桂樹:戦捷記念図案資料』には、次のような記述がある。

…終に日清戦争の時には聞かなかつた此樹(月桂樹:著者注)が此度の戦争(日露戦争:著者注)と共に我國民に大に知らるることになつた。それが民間とか下様とかの間のみではなく、上から下まで通じてのことである。新聞や雑誌も書かないのではない位である²⁰。

日露戦争後は、日本国内で凱旋門の建築が一大ブームとなり、月桂冠もモチーフとして使用された。パリのエトワール凱旋門には月桂冠を授けられるナポレオンの彫刻があるが、1905(明治38)年10月に建造された日本橋凱旋門にも月桂樹のモチーフがあしらわれていた。日本酒「月桂冠」も、伏見の酒造業の第11代目当主であった大倉恒吉がこの年に商標登録し酒銘に採用している²¹。

前掲の『月桂冠:戦捷記念図案資料』では、日本で月桂冠というモチーフが広く受け入れられた理由が次のように記述されている。

此^{ローレル}月桂樹といふものは従来日本には産せなかつたのであるが、月桂といふ文学は昔ながらのことである。それは支那伝来の思想の上に月桂といふものが高潔な品位のよいものとして詩歌に謠はれた。それが今の月^{ローレルクラウン}桂冠といふことと思想上関連して持て囃されるので、即古来東洋伝

²⁰ 大日本図案協会編、1905年、13-14頁

²¹ なお、月桂冠株式会社の公式HP内「月桂冠中興の祖大倉恒吉物語」には、「オリンピックの勝者に贈られる「月桂冠」と名付け、酒の王者をめざすという心意気を表現したものである。」との記述がある。https://www.gekkeikan.co.jp/company/biography_11th/challenge.php

来の思想に西洋思想の類似せる伝来と具体的に実際の月桂樹を配合することになった。²²

この指摘からもわかるように、日露戦争後に日本で月桂冠が勝利の象徴として受け入れられた背景には、古代中国の伝説である月に生えているというカツラ（月桂）の知識や、イギリスの桂冠詩人 poet laureate に関する知識など様々な影響があったことが想像される。

2-2. スtockホルムオリンピックとの関連

1912（明治45）年にスウェーデンのストックホルムで開催された第5回オリンピックは、日本選手が初めて公式に出場した大会である。NHKで放送された『いだてん』の主人公のひとりである金栗四三と、三島弥彦の2人が羽田運動場で開催された選考会を経て参加している。ストックホルムオリンピックは、それまで日本国内では一般にあまり知られていなかったオリンピックが、日本人選手を派遣することによって広く知られるきっかけとなったといえる。この年の朝日新聞では、7月17日の朝刊の「マラソン大競争」という記事において「選手に月桂冠…皇太子アドルフ殿下及チャールズ殿下は第一、第二、第三着選手の頭上に月桂冠を置きたり」と、写真と共に伝えている²³。また、8月7日朝刊にも写真が掲載され、「オリンピック選手に月桂冠、瑞典国王グスタフ五世陛下第一着選手の頭上に月桂冠を置く」と報じられた²⁴。

これらの報道は、日露戦争以降に勝利の表章としての月桂冠のイメージが一般に定着していたことによって、「勝者に与えられる葉冠=月桂冠」である、との誤解を強めたと考えられる。この時点ですでに「オリンピックで与えられるのは月桂冠である」という記述のある著作が複数あったことから、誤りを訂正することは難しかったと考えられる。

2-3. ベルリンオリンピックの報道と月桂冠

1964年に行われたベルリンオリンピックでは、日本代表として出場したマラソンの孫基禎と女子水泳の前畑秀子ら6名が優勝して金メダルを獲得した。朝日新聞では、1936年8月11日孫選手の優勝に際して号外を出し、表彰台でオリーブ冠を被った写真に「輝く月桂冠」と題をつけた²⁵。ベルリン大会開催の直前に行われたIOC総会では1940年に行われる第12回大会の東京開催が決定しており、日本国内のオリンピックへの注目度は非常に高かったと考えられる。このベルリン大会での報道によって、「オリンピックの勝者=月桂冠」という誤解は決定的になったと考えられる。1936年に出版されたオリンピック関連の書籍の多くで、古代オリンピックの勝者には月桂冠が与えられ

²² 大日本図案協会編、1905年、20-21頁

²³ 朝日新聞1912年7月17日朝刊「マラソン大競争」

²⁴ 朝日新聞1912年8月7日朝刊「オリンピック選手に月桂冠」

²⁵ ベルリンオリンピックでは、ギリシャから飛行機で運んだオリーブを使って入賞者の冠がつけられた。また、1928年から1968年まで夏季オリンピックではメダルに同じデザインが使用されていたが、このデザインはイタリアのジュゼッペ・カッシーオリが制作したもので、左手にヤシの木、右手に勝者の冠（オリーブ冠）を持つ勝利の女神が刻まれている。

た、との記述がみられ、この知識は一般化していたといえるだろう（巻末資料参照）。孫基禎がのちに出版した自伝のタイトルも『ああ月桂冠に涙』である。

しかし、前述のように、この時期にあっても野口（1936）は、オリンピックの勝者に与えられるのはオリーブの冠であり、ベルリンオリンピックで使用されたのもギリシャから空輸したオリーブであることを指摘している。当時においても正しい情報に触れることが不可能ではなかったことが分かるが、一度形成されたイメージを覆すことは難しいことだったのかもしれない。

2-4. なぜ誤解は解かれなかったのか

本論で扱う内容の調査を行う中で最も不可解だった点として、大日本体育協会や講道館に関わる出版物において「オリンピックと月桂冠」に関する記述がみられるということが挙げられる。大日本体育協会（現公益財団法人日本スポーツ協会）は、1911（明治44）年にIOC委員であった嘉納治五郎を中心に設立された。オリンピックに日本から選手を派遣すべくつくられた団体であり、実際にその役割を担っていた。日本で最もオリンピックについて詳しいはずの団体に関わる書籍に、「オリンピックと月桂冠」の記述が複数みられる。

1927（昭和2）年の官報に「明治神宮大会と古代ギリシアのオリムピア祭」という文章があるが、著者は大日本体育協会の設立にも関わった可児^{かに}徳^{いさお}である。ここでは、「…賞品は、純ギリシャ系の両親の現存した男児が、金の斧をもつてアルチス森の聖木、月桂樹を裁り、これをいったんヂユースの神前に捧げた上、その梢をためて造つた花環に過ぎなかつた」²⁶と記述されている。

1936（昭和11）年に出版された『オリムピックの書』には、「競技の勝利者に与えられる商品は唯一つ、ヘラクレス Heracles の発案による野生の月桂樹の葉環であるとエリスの伝説に伝つてゐる。…現在オリムピック大会の優勝者三人の頭に飾られるものも之に起因してゐる。此の葉環はオリムピアなるアルチスの森のヴナスの祭壇近くに繁つた神聖なる月桂樹の葉で作られた。」²⁷とある。古代オリンピックについて詳細に述べられているが、この誤解は修正されない。また、大日本体育会委員である鈴木良徳が著者であり同年に出版された『オリムピック読本』『少年オリムピック読本』でも、勝者に与えられるのは「月桂冠」と記述されている。前掲の箕作元八の寄稿「希臘民族の大祭典オリムピヤ競技」も雑誌『柔道』（柔道界本部）に掲載されたものである。

なぜ、このような誤解の再生産が行われたのかという点を明らかにするため、今後さらに検討が必要である。特に、本論に挙げた著作はおそらく、ギリシャ語やラテン語の原著ではなく英訳や他の言語に翻訳された書籍を基にしていると考えられるため、基になったそれらの文献が元の言語から翻訳された時点ですでに誤訳がある可能性も否定できない。今後の課題としたい。

²⁶ 可児、1927年

²⁷ 大日本体育協会、1936年、162頁

おわりに

日本において、「オリンピックでは勝者に月桂冠が与えられる」という誤解がどのように生じたのかを、明治期から昭和中期の資料を中心に検討した。その結果、日本国外を原産とする月桂樹とオリーブは、その名称の翻訳の段階から様々な誤解や誤訳を経ていたことがわかった。そのような中であっても西洋史の翻訳の過程ではオリーブは「橄欖」と訳され、明治初期には古代オリンピックでは勝者に「橄欖の冠」がおくられたとの記述がなされていたが、日露戦争を前後して「オリンピックと月桂冠」という誤解がうまれた。現時点で確認できた古代オリンピックで月桂冠が与えられたとの最初の記述は1899（明治32）年の箕作の著作であるが、なぜそれ以前には他の訳者が「橄欖の冠」と訳していたものを「月桂冠」とするに至ったのかさらなる検討が必要である。

日露戦争の戦勝によって日本国内で一般化した「勝利＝月桂樹、月桂冠」のイメージは強く、その後もオリンピックに関連する報道で度々用いられた。その結果として、学校教科書や百科事典、図鑑などにも「オリンピックと月桂冠」という記述がみられるようになった。

すでに触れた、本論文で明らかにできなかった点については今後も検討を継続していきたい。

参考文献

- 東竜太郎『オリンピック』わせだ書房、1962年
大塊生「オリンピックゲームの優勝者」『運動世界』（新年號）（10）運動世界社、1909年
大日本体育協会『オリムピックの書』三省堂、1936年
大日本図案協会編『月桂樹：戦捷記念図案資料』本田雲錦堂、1905年
エフ・エイ・エム・ウエプスター（宮原治、森田俊彦訳）『オリンピック競技史』日本青年館、1937年
ヒロビブリアス（西村茂樹訳）『教育史. 上』文部省、1875年
広瀬謙三『運動競技の研究』東都書房、1925年
広瀬謙三『運動競技の新研究』章華社、1927年
藤井實「世界最大の運動競技会（オリンピヤの運動会）」『世界之少年』2（1）、有楽社、1907年
金子務「「オリーブ冠」「月桂冠」「いばら冠」をめぐる冠植物の訳語受容問題」『東アジアにおける知的システムの近代的再編をめぐる— 北京大学国際シンポジウム2007より』国際日本文化研究センター、2008年
可児徳「明治神宮大会と古代ギリシアのオリムピア祭」官報第255号、1927年11月2日
岸野雄三「いわゆる「月桂冠」競技の問題」『体育の科学』6（10）、1956年
小高吉三郎『朝日常識講座 スポーツの話』朝日新聞社、1930年
箕作元八、峯岸米造『西洋史綱』六盟館、1899年
箕作元八『西洋史綱要解. 上巻』六盟館、1899年
箕作元八「希臘民族の大祭典オリンピヤ競技」『柔道』2（10）、1916年

日本書籍「オリンピックの由来」『小学校国語 5年の1』（昭和35年検定）、1960年
 野口源三郎『オリムピックの知識』成美堂、1936年
 大谷武一「オリンピックゲームズ」『作興』3(9)、講道館文化会、1924年
 田代安定「阿利襪と橄欖および胆八樹の辨別」『農業雑誌』学農社、1877年
 飛田穂洲、豊島與志雄 編輯『スポーツと冒険物語』（日本少國民文庫；第11巻）、新潮社、1936年
 内山舜『花の物語』実業之日本社、1914年
 ウェブスター（宮原治、森田俊彦訳）『オリンピック競技史』日本青年館、1937年
 ウィルレム・チャンブル、ロベルト・チャンブル 編『百科全書希臘史篇』文部省、1883年

卷末資料. オリンピックにおけるオリーブ冠と月桂冠に関する記述のある主要文献

年	橄欖	オリーブ	月桂樹	書名（雑誌記事タイトル）
1875（明治8）	/	/	/	初学須知（牙氏）／第二十八 月桂樹（ローリエー）
1877（明治10）	/	/	/	農業雑誌／阿利襪と橄欖および胆八樹の辨別
1882（明治15）	○			教育史. 上
1883（明治16）	○			百科全書. 希臘史篇
第1回オリンピック（ギリシャ・アテネ）1896				
1899（明治32）			○	西洋史綱要解 上巻
1899	○			中等教科西洋史 巻1
日露戦争 1904-1905				
1905（明治38）			○	月桂樹：戦捷記念図案資料
1909			○	山窓夜話：冷灰二筆／日比谷公園の月桂樹
1909（明治42）			○	運動世界 新年號（10）オリンピヤゲームの優勝者
1907	○	○		世界之少年, 2(1)／世界最大の運動競技会
第5回オリンピック（スウェーデン・ストックホルム）1912				
1912（明治45）			○	朝日新聞 1912年7月17日朝刊／マラソン大競
1912（大正元）			○	朝日新聞 1912年8月7日朝刊／オリンピック選手に月桂冠（写真）
1914（大正3）			○	花の物語
1915（大正4）			○	朝日新聞 1915年5月20日／●多久選手に月桂冠
1915			○	西洋史話／オリンピヤの競技の話
1916（大正5）			○	柔道, 2(10)／希臘民族の大祭典オリンピヤ競技
1917（大正6）			○	ローマ字／Olympia to Olympic Kyogi.

1917			○	朝日新聞 1917 年 5 月 1 日／栄ある優勝牌を翳して極東選手の勢揃ひ
1917			○	飛行少年, 3 (7)
1920 (大正 9)			○	朝日新聞 1920 年 4 月 24 日／健児二百全国より最後の予選に集る
1921 (大正 10)			○	図案の意匠資料
関東大震災 1923 年 9 月 1 日、大日本体育協会「第 8 回国際オリンピック大会参加の宣言」(10 月 1 日)				
1923 (大正 12)		○		歴史と地理, 12 (2) / オリムピヤ祝祭について
1923 (大正 12)	○			運動競技と国民性
1925 (大正 14)	○			作興／オリンピック・ゲームズ
1924 (大正 13)		○	○	運動競技の研究
1926 (大正 15)	○			女子陸上競技の実際
1926		○		世界歴史読本, 第 1 編／オリムピヤの競技
1927 (昭和 2)			○	欧米体育史
1927			○	官報, 1927 年 11 月 2 日／明治神宮大会と古代ギリシアのオリムピヤ祭
1927		○	○	運動競技の新研究
1927	○			僕等のスポーツ
1929 (昭和 4)		○		児童の本性に立脚せる遊戯教育の実際
1929			○	各流水泳と登山／オリムピックの話
1930 (昭和 5)		○		朝日常識講座第 2 スポーツの話／聖地オリムピヤ
第 11 回オリンピック (ドイツ・ベルリン) 1936、1940 年第 12 回大会の東京開催が決定				
1936 (昭和 11)			○	朝日新聞 1936 年 8 月 11 日／孫選手に輝く月桂冠
1936			○	朝日新聞 1936 年 8 月 11 日号外／輝く月桂冠
1936			○	朝日新聞 1936 年 8 月 13 日／水の女王に輝く月桂冠
1936			○	オリムピックの書
1936			○	一回から十回までのオリムピック競技記録
1936			○	スポーツと冒険物語／オリムピック物語
1936			○	少年オリムピック読本
1936			○	オリムピック読本
1936	○	○		オリムピックの知識
1936	○			スポーツの由来とその転化
1937 (昭和 12)	○	○		オリンピック競技史

1940(昭和15)			○	牧野日本植物図鑑
1950(昭和25)		○		体育学(基礎学選書)
1953(昭和28)	○	○		体育総論
1956(昭和31)		○	○	スポーツ
1960(昭和35)			○	小学校国語5年の1/オリンピックの由来
1962(昭和37)		○		オリンピック
1985(昭和60)			○	ああ月桂冠に涙